



アメリカの対抗勢力を目指すイラン

核問題で緊迫するイラン情勢

核兵器開発疑惑をめぐってイラン情勢が緊迫している。IAEA（国連原子力機関）は11月18日、イランが核兵器開発を進めているとする報告書を提出した。これに対し、欧米は的確に対処できず、イランは強行姿勢を崩していない。「イランがいよいよ欧米諸国との最終対決（Final Confrontation）体制に入った」と分析する専門家もいる。イランはなぜ世界に対抗するのか。世界はこれからどうなるのか。イスラエル軍大佐でイラン情勢に詳しいミッキー・シーガル氏が行った記者会見を元に分析する。【エルサレム・石堂ゆみ】



■イランの核兵器開発疑惑

「イランが核兵器を開発しているのではないか？」という疑惑は今に始まったことではない。イランのアフマディネジャド大統領から「地図から消し去ってしまえ」と名指して公言されてきたイスラエルは、国際社会に対して何年も前からイランの核兵器開発を警告し続けてきた。しかし国際社会は、ここ30年ほどの間、イランに対して何ら効果的な抑止政策を行ってこなかった。

この均衡を破ったのが日本人外交官で、現在IAEAの事務局長を務める天野之弥（ゆきや）氏である。2009年11月まで事務局長を務めたモハメド・エルバラダイ氏（エジプト）がイランの核開発について明確な報告をしてこなかったことから一転し、詳細な



証拠を挙げてイランの核兵器（原子爆弾）開発を指摘したのである。

この「正式な」報告を受けて、世界は慌て始めた。まず、「いよいよイスラエルがイランの核施設を先制攻撃するのではないか？」という憶測が世界を駆け巡った。イスラエルは、イランが核兵器を完成するまでにあと数

ヶ月、と予測しているからである。



しかし、イランの核施設は全国に散在している上、通常の高層ビルでは到底届かないような地下にある。実際にはイスラエル一国だけの攻撃では無理

だろう。かといってアメリカ軍やNATO軍が攻撃すれば、中東全体が戦闘状態となる。たとえ攻撃して一時的に核開発を遅延させたとしても、石油で潤うイランはすぐに回復し、いずれ核兵器を完成することだろう。軍事攻撃という選択肢は否定できないものの、イスラエルも欧米も足踏みせざるを得ないのが現状だ。

■欧米の脆弱な経済制裁

イランへの軍事行動という選択を避けるなら、残るのは経済制裁しかない。国際社会は I A E A の査察を何度となく拒んできたイランに対し、既に4回の経済制裁を実施した。しかしイランの姿勢を変えるまでには至らなかった。今回、さらに制裁を強化すれば、5度目の制裁ということになる。

これにはロシアと中国が反対している。5度目になる経済制裁は「西側からの戦争行為と同じ」と見なされ、問題の外向的解決の道を阻害するだけだというのが理由だ。確かに、厳しい制裁を実施すれば、その対抗措置としてイランがホルムズ海峡を閉鎖してしまう懸念もある。世界中に石油を運搬するタンカーの40%が、日々この狭い海峡を通過している。ここを封鎖されれば、世界経済が混乱に陥る可能性もある。特に、原油輸入総量の約12%（第3位）をイランに頼る日本は、最も影響を受ける国の一つになるだろう。



では、イランの核兵器開発を見過ごしたままでいいのか。アメリカは18日の発表から5日経って、イランの海外資金の凍結などの経済制裁を発表した。続いてイギリス、カナダ、ドイツ、フランスもイランに対する経済制裁を発表した。しかしどの国の経済制裁も、イラン中央銀行や石油に直結する分野への制裁は盛り込まれておらず、今のところ決定的な制裁にはなっていない。イランはこの脆弱な経済制裁を「無駄なこと」と一蹴している。

今世界は、核兵器完成を間近にしたイランを前に、もはや何もできない状態だ。ではこのままイランが核兵器を保有するようになればどうなるのか。

■イランが核を保有したら

現在、中東で核兵器を持っているのはパキスタンとイスラエルである。（イスラエルは、核を持っているとも持っていないとも明言しない政策を取っている。）そこでイランは、「イスラエルが持っているのになぜイラン

はいけないのか？」との主張もある。確かに、イランにも核を持つ権利はある。

しかし問題なのは、現在のアフマディネジャド政権が核兵器を保有することである。この政権は、隣国シリアを押さえ、レバノンに寄生するテロ組織ヒズボラ、ガザのハマスをはじめ、北アフリカや世界に散らばっているテロ組織を背後で支援している。アメリカは、イランをテロ支援国家と指定する。そんな政権が核兵器を持てば、たとえイラン自身が使うことが無くても、テロ組織に核兵器が流れ、どこでいつ核兵器が使われるかも分からない。

さらにイランが核を持てば、中東中に核が広がる恐れがある。既にサウジアラビアは、対抗措置として、「イランが核を持てば我が国も保有する」と言っている。急進なシーア派の現イラン政権は、穏健なスンニ派のアラブ諸国にとっても脅威なのである。

イスラエル軍大佐のシーガル氏は、この問題がイスラエルとイランだけの限局した問題ではないと強調する。イランにはさらに大きな最終目的があるというのだ。

■イランの最終目的

シーガル氏によると、イランの最終目的は、中東からアメリカの影響力を締め出し、世界でアメリカに対抗し得る国際勢力になることだという。そのビジョンの始まりは、1979年のイラン革命に見ることができる。イラン革命では、当時アメリカの傀儡政権をつくっていたパーレビ国王が追放され、ホメイニ師率いるイスラム原理主義勢力が国を統治するようになった。

そしてこの革命は、中東からアメリカを追い出し、イスラムの誇りを取り戻すという希望を中東全体にもたらした。イランがイスラム原理主義復興の中心となっていくのである。

その後、イラクのサダム・フセイン国王が中東の盟主になろうとしたが、湾岸戦争とイラク戦争によってアメリカに敗れた。さらに今年、事実上中東の盟主だったエジプトのムバラク大統領が失脚し、リビアのカダフィ大佐も死亡した。

つまり中東で今アメリカに対抗し得る国と言え、イランだけなのだ。イランは、今こそ自分の出番だとして、アメリカの強大な影響下に甘んじてきた中東の地図を

本格的に塗り替えようとしている。世界にもイスラム（シーア派）の影響を拡大していこうという狙いもある。そのためのカードが核兵器なのだ。シーガル氏は、「欧米はこのイランの勢いをもはや止めることができなくなっている」と危機感を募らせる。

■失われたチャンス

シーガル氏によると、過去にイランの勢いを止めるチャンスはあったという。特に、今年2月にイランでも起こった反政府運動は、現政権を倒す最後のチャンスだった。「イスラム原理主義の諸団体が関わっているリビアやエジプトの民主化運動と違い、イランでの反政府運動は純粋な民衆蜂起だった」とシーガル氏は言う。

もしあのときにアメリカが少しでも彼らを助けていれば、今の過激な政権を、もう少し穏健で親米派の政権に変えることができたかもしれない。しかしオバマ大統領は、何もしなかった。そしてイランのアフマディネジャド大統領は、反政府運動を間もなく鎮圧してしまった。イラン国内から政権を変えるという可能性は失われ、その後欧米は何をしても後手に回るようになったのだ。

■欧米との“最終対決”



シーガル氏は、イランが欧米との最終対決（Final Confrontation）に向かっている兆しがあると語る。最終対決と言っても、軍事対決だけを意味する

のではなく、外交、経済などあらゆる分野での対決だ。

理由の一つは、IAEAの発表でイランがもう後戻りできなくなったことが挙げられる。今、対立姿勢を崩して欧米の圧力の屈すれば、中東の覇者にはなれない。むしろ欧米と対立すればするほど、強いイランをアピールすることになる。従ってイランは、これまで以上に対決姿勢を明確にしてくると予想されるのだ。

実際イランは、IAEAの発表以来、ヒズボラやハマスなどのテロ組織を支援していることを隠そうとしなくなった。テロ組織の方でも、イランとの関係を大胆に

公言するようになった。南レバノンのヒズボラは、「もしイスラエルや欧米がイランやシリアを攻撃すれば、地域全体が混乱することになる」と、自らが関与して周辺国を攻撃することを宣言した。

また、残虐さで有名なイラン革命軍が、以前にも増して国内外で活発に動き始めたことも注目されている。



革命軍は、国内で人民を強かに支配し、国外では、混乱するイラクをはじめ内戦状態に陥っているシリアでも活動している。また、リビアやエジプトなど北アフリカ諸国でもその姿を現している。これらの国で新政権が立ち上がったときには、イランが影響力を及ぼすことは間違いない。こうしてイランが中東に勢力を伸ばしていくことになるのだ。

そのイランを保護しているのがロシアと中国である。つまり、イラン問題が、[欧米+イスラエル] 対 [共産国+イラン（中東）] というグローバルな対立の構図へと発展し始めているのだ。チェスはイランから始まったと言われる。「今、イランは数手先まで読み込んで、世界の覇者になるビジョンにむけて着実に動きだしている。」とシーガル氏は語る。

今回の取材で、一時イスラエルに来ている日本の某大手新聞社のテヘラン支局長に話を聞くことができた。彼によれば、イランの首都テヘランでは自由な取材活動ができないということだった。誰も取材に応じてくれないばかりか、政府も情報公開をほとんどしないとのこと。ノンクリスチানের支局長が、「イランにいると空気が重くて疲れる。晴れていても、どんより曇っているようで嫌になる。」と言っていたのが印象的だった。世界情勢をそのまま霊的な事象に当てはめることは出来ない。しかし終末に向けて、今、霊的領域もグローバルな規模で動き始めていることを感じる。